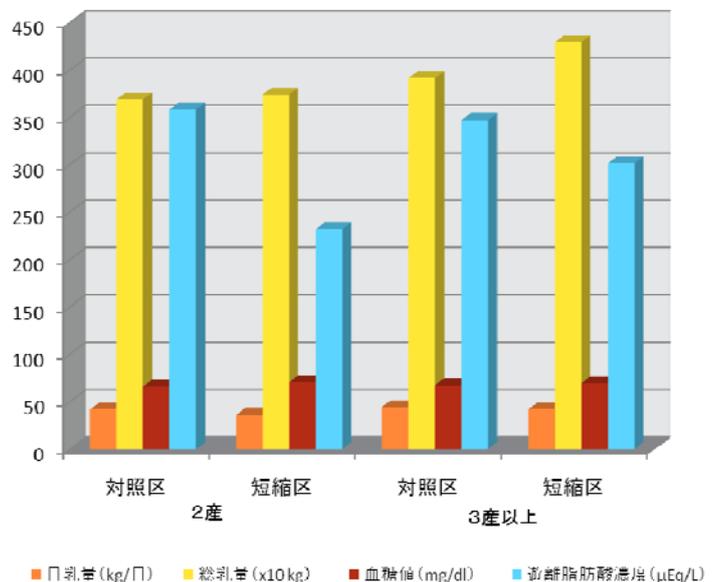


## 乾乳期間 30 日への短縮は 泌乳前期の乳量を抑制し、栄養状態を改善

わが国における乳牛の 305 日乳量は、飼養管理の改善や遺伝的改良により平成 20 年には 9,315kg まで増加しています。そのため、分娩前 60 日でも乳量が 20kg/日以上以上の乳牛も多くなっており、搾乳期間の延長が考えられます。しかし、乾乳期間の短縮が分娩後のエネルギーバランスや乳量に及ぼす影響については明確になっていないので、乾乳期間を 30 日に短縮し、泌乳前期の乳量・乳成分、血液成分、TDN 充足率、体重等に及ぼす影響について検討しました。

### ☆ 技術の概要

- 短縮区は泌乳後期牛を用い、グラスサイレージ (GS) 主体の混合飼料 (粗濃比 3 : 1、乾物中 TDN68%、CP16%) を不断給飼して搾乳期間を延長し、乾乳期間を 30 日としました。対照区は分娩前 2 ヶ月の乾乳牛を用い、分娩前 1 ヶ月までは乾草 (乾物中 TDN60%、CP10%) のみを不断給飼しました。両区とも、分娩前 1 ヶ月からは乾草、GS を不断給飼とし、配合飼料を制限給飼し (乾物中 TDN65%、CP13%)、分娩後は混合飼料 (粗濃比 6 : 4、乾物中 TDN72%、CP16%) を不断給飼しました。
- 乾乳期間の短縮により泌乳前期の乳量が抑えられ、乳タンパク質率が増加し、TDN 充足率が上昇する傾向を示しました。乳量は 3 産以上より 2 産の乳牛で抑制されました。
- 分娩前 9 週から泌乳前期 12 週の総乳量は、乾乳期間の短縮により増加する傾向を示しました。
- 分娩後の体重およびボディコンディションスコア (BCS) の低下は乾乳期間の短縮により減少し、早く回復する傾向を示しました。
- 乾乳期間の短縮により分娩後の血糖値が上昇し、遊離脂肪酸濃度が低下し、栄養状態の改善が示唆されました。



### ☆ 活用面での留意点

泌乳末期の高泌乳牛に対して搾乳期間延長を検討する酪農家の参考になりますが、乾乳期間の短縮が一乳期の乳量に及ぼす影響についてはまだ未検討ですので、詳細は、農研機構北海道農業研究センター上席研究員中村正斗 (TEL: 011-857-9260) にお問い合わせ下さい。

(日本政策金融公庫 農林水産事業本部 テクニカルアドバイザー 加茂幹男)